図書館通信　—56—

1981．7

附属図書館のあり方をめぐって

前館長　豊　川　卓　繭

日本の大学の急速な拡充＝充実がおしすすめられてきた一方、大学附属図書館のたちおくれがめだち、その危機状況は10数年前の東大岸本館長の問題提起となって意識化され、図書館近代化の動きがはじまりました。日本における大学近代化のたちおくれは、とくに図書館においてめだっています。かの大学「紛争」も、図書館問題を提起できずに通りすぎてしまい、学生・教職員による図書館改革の内的モメントも、「定員外」問題に集中化されて拡がりをもたないでいます。図書館情報大学の松田智雄学長の表現によれば、図書館については、「わが国の状況はあきらかに発展途上国の段階にあり、少なくとも図書館に関する国民的認識の度合い、ことに文教政策のなかにおける図書館の位置づけは極めて低い。」学術研究と高等教育のセンターとしての大学の位置づけの中で、図書館のキャンパス内外での社会的地位の低さは、大学近代化のたちおくれの遺産の集中的表現ともいえます。

学生・研究者の利用度の低さとサービスの不十分さは、図書館職員と財政の構造的な不足を媒介にして、スパイラル(Spiral)の関係にあります。共通部局の経費圧縮によって研究費の不足を埋めようとする教官たちのテリブルな情熱の赴くところ、図書館もまたその的から免れることはないようです。事態は30年前からくり返されています。

大学の質は、教授陣（ファカルティ）と図書館によって規定される、といわれています。図書館にかんする最先進国としてのアメリカの地位は、国際的に承認されていることですが、今からおよそ100年ほど前、大学図書館は、College and research library としての近代化のための決定的な改革の道をふみだしました。蔵書量の拡大、図書館学の第一歩として書誌学の講義、本格的な図書館建設、図書館職員のための専門教育の開始（Melvil Dewey の提案）とそのための図書館学校の設立（Columbia 大学）、開架式 (open stack or open aceess) の採用、目録の印刷カード化、大学図書館相互協力（カード目録の交換、合同目録の作成など）、デューイ分類法の採用、「レファレンス」業務のはじまりなど、19世紀70年代から20世紀初頭にかけて、大学図書館の改革はめざましいものがあり、今日の大学図書館の原点となりました。例えば開架制の採用をめぐる烈しい討議ののち、急速に部分開架制からはじまって、今日の全面開架制に移行した歴史は、戦後やっと部分開架制をとりいれたわが国にとって教訓的です。アメリカの大学図書館にとって、Library of Congress や New York Public Library など公立図書館の役割も大きかったことを考えると、わが国の国会図書館の在り方について考えさせられることが多いようです。

学術情報システムの実現化を目前にして、附属図書館の充実と改善は、図書館予算その他図書館委員会のあり方をも含めて、大学の質に直接責任をもつファカルティ・メンバーならびに学生諸君の積極的な発言や行動に期待するという、ありきたりの結論が、管理職の立場から利用者の立場に戻るにあたっての私の感想です。2年間ご協力いただいた図書館職員ならびに委員会メンバー、丸山学長および事務局の方々に感謝いたします。

（人文・経済）

休　館

7月21日(火)～7月25(土)

延長開館の休止

7月27日(月)～8月31日(月)

私のすすめたい本 39
～夏休みのための読書案内～

—人間は人間にとって謎であること—

佐々木敏光

「肉体は悲し、ああ、われは全ての書を読みぬ」と、フランスの詩人・マラルメが溜息にも似た叫びをあげてから百年後、私も「われは全ての書を読みぬ」と低い声で唱和したが、それは十五年前。青春の奢りの季節であった。

「日の下に新しきものなし」と聖書に記されて以来、どれだけの本が書かれたことだろう。それらは人間の精神の格闘の証であり、人間という謎の究明の作業でもあった。しかしそのために人間という謎が解き明されたわけではない。追究の手順がより精密になるにつれ、ともすれば大きなものが見失なわれがちになる。今まで見すごされていたものが新たな謎になる。そのようにして本は書き続けられてきた。ところで今日は新刊書の洪水である。安易につくられる本も少なくない。こうした本の氾濫の中で、本離れも着々とすすんでいる。氾濫しているのは本だけではない。映像、音楽、等々魅惑的なミューズにはこと欠かない。たしかに本を読まなくても生きていけるのだ。そして、大学に入らなくても生きていけるのも事実だ。幸か不幸か、本に出会った人間は、書物を介して人間という謎に直面した人間は、本を読みつづけざるをえないし、読むに価する本を探し続けるより他はない。また、大学に入った人間は、やはり何らかの形で本にかかわりを持たざるをえない。それ以上は言うまい。

さて、本は無数にある。無数の本の中から自ら選ぶ。そこから読書が始まる。講義の中で言及された本、友人との会話の中で語られた本……。しかし選ぶのはあくまでも自分なのだ。書店に入った瞬間、ある本のタイトルが大きな活字となって目にせまってくるかもしれない。図書館の書架の片隅で、まだ誰にもかりられたことのない本が、ほほえみかけているかもしれない。それをとりあげて読み始めるのはこの自分なのだ。

最後に、夏休みにもし出会いがあれば読んでほしい本、それも比較的長い本をとりあえず文学書に限り二冊とりあげてみたい。

ドストエフスキー著『カラマーゾフの兄弟』人間の魂の深淵を脳髄をゆるがすほどの迫力で描きだしたこの作品に関して云々してもはじまらない。名のみ高く読まれることの少ない本の一つとしてあげることにした。

マルケス著『百年の孤独』（新潮社刊）専門のフランス文学をさしおいてこの本をとりあげることになったが、フランス文学の諸作品は比較的出会う機会が多いと思われる。（ところでラブレーという名を知っているだろうか。私の好きなフランスの作家の一人である。）ので、あえてこの南米・コロンビアの作家の本を選んでみた。外国文学イコール欧米文学という常識があいかわらず支配的だが、厳しい現実の中で、豊かな想像力を駆使し、人間の叫びをとらえ、大いなる人間の謎へ挑戦している国々の文学もあることも知ってほしい。この本は人間の（具体的にはある一族の）生の高揚と失墜とを悲劇的に、喜劇的に、そしてそれらを幻想裡にえがきあげた二十世紀文学の大きな収穫でもある。

（教養部・フランス文学）

憲法の原点を見つめよう

竹宮　崇

学生諸君は、戦後世代であり、戦中、戦後の悲惨な体験を持たない。日本の一見平和で、経済の高度成長時代に育ち、民主的な憲法の下で、民主的な教育を受けてきた。しかし、それだけに、戦争とか平和についてのつきつめた意識や、民主主義とはいかなる主義であるか、現代日本の民主主義はどのような情況にあるか等を問う姿勢がいささか薄れてきているのではないかと思われる。

昨秋の奥野法相の改憲発言以来、憲法を廻る情勢は一段と緊迫している。有事法制、核持込み、高校教科書（社会）の全面改訂の問題等々、国の進路に重大な影響を及ぼす諸問題があいついで報じられている。ところが、国民が果してこれらの問題についてどのように考えているのか、いっこうに伝わってこない。マス・メディアによる情報の独占が進む中で、国民は受動的に情報を受けとるばかりで、自らの意思を伝達する手段は、ごく限定されたミニ・コミの世界に押込められている。民主政治の基本的要素である言論の自由は形骸化

され、その内実は不自由に転化している。憲法上の民主政治や人権の尊重が人類の崇高な理念とされているにもかかわらず、現実の憲法情況がそれとははなはだしく隔たっているのはなぜであるのか。憲法そのものに構造上の欠陥があるからなのか、国民の憲法意識がなお未成熟であるからなのか、それとも、その他の何かの要因によるものなのか。解答は容易ではないが、唯一つ重要な点を示唆するとすれば、それは民主主義とか国民主権とかいわれる理念の本質的な虚構に目を向けることの必要性であろう。国民主権とは読んで字の如く国民が主権者であるということであって、全ての国家権力の淵源は国民にあり、国民が国家意思の最終的決定権者であるということである。ところが、日本国憲法によれば、国民が直接に国家意思決定に参与しうるのは、憲法改正の国民投票と地方自治特別法への住民投票の2つの場合に限られている。国民は、国民代表を選ぶための選挙という手段を通じて、間接的に国政に関わっているにすぎない。かって200年前、J・ルソーは「イギリス人は、自分達は自由だと思っている。しかし、自由なのは選挙のときだけで、選挙が終われば再び奴隷となり、全ては無に帰してしまう」と述べているが、これほど代表制民主政のもつ虚構性を鋭くえぐった警句はないのではあるまいか。

戦後議会制民主主義といわれる政治の中で、国民の意思とかけ離れ、憲法をも空洞化しつつ大きく右旋回を遂げようとしている情況の下で、私たちは、民主主義の意味を問い直し、虚構を実像視し、虚構の中で安住するのではなく、虚構は虚構として見据える中から、国民ひとりひとりの主権を内実化する可能性を探ってゆかねばならないのではなかろうか。その作業を進めていくうえで有益な教示を与えられる書として次の2冊を推薦する。

樋口陽一　『議会制の構造と動態』(木鐸社)
杉原泰雄　『国民主権の研究』(岩波書店)

(法経短期大学部・憲法学)

“科学”をさかのぼる
——科学史から科学を学ぶ

石川勝利

諸君が専門をかじり、少しでも研究の雰囲気に近づくに従い、個々人の活動している範囲が勢い小さく限られていく傾向にあるのに気づくことはないだろうか。そして、時には「深遠な自然と対面する人間にとって科学とは何か」を問いかけたりする。ここでいう科学とは〝自然科学〟の意味で考えておきたい。現代の科学は日進月歩の勢いで、それも加速度的に進んでいく——学問は極度に専門分化し、各々の分野に入り込むと、他に対する展望をもつことが難しくなる。致方ないことでもある。そのために、科学全体になおのこと目を向けなければならないという願いが、今に始まったことではない切実な問題になっている。

このような立場から、これを乗り越えようと思ったとき、科学全体を現在の広がりのままに理解を深めることもあながち不可能ではない。しかし、今日まで探索されてきた豊富な結果から汲み取るためにも、歴史的にさかのぼることによって、主要事実を引き出しそれらを関係づけ、一層深い見方を持ち出すことも一つの行き方であるように思う。他方、私達は科学を現在も発達しつつある、従って、未完成なものと見ることによって、偏狭な思い込みにおちいらないようにしなければならない。——研究者達は、偶然も、錯誤も、遂行もあり、その道筋は決して直線的ではなく論理的でもないそれぞれのおかれた時代や環境のなかで、個人の喜びと感動を伴なって可能な道を探し求めているものである。更に、今日用いられているのと同様の方法や推理の方法が、科学の過去の発展の中にも見出されるものである。このため、以前の研究や考えや推理にふれるとある原理や学説の内容は、一層分り易くなり、より深く理解できる分野も多い。

科学史から科学を学ぶ——最近、自然科学の歴史に対する興味は非常に活発で多くの書物が出版されている。一体に科学史に近づく動機も種々で、読む人にとっても種々な効用を発揮しうるものである。私自身教えられる書物は数多くある。紙面の関係でここには、手もとにあり色彩の違う数冊をあげて、何らかの学問的挑戦を汲み取り、各自の勉強と思索の発展に役立つための簡単な手引きとしておきたい。(1) ≪新訳ダンネマン大自然科学史≫(全12巻、別巻1巻) 安田徳太郎訳・編、三省堂　昭54：自然科学の全分野を古代から20世紀初頭までカバーする通史としての大著だが、それだけに価値の高い歴史的な資料が備わり辞典的なものでもある。旧訳を大幅に追加した訳注は、単なる原著の補注ではなく、時には原文を大きく訂正する独自の見解も提出し、全体としてすぐれたものである。(2) ≪五人の大科学者—その想像的対話≫M・ホスキン著　道家達将訳、蒼樹書房昭46。(3) ≪エピソード科学史Ⅰ～Ⅳ≫A・サト

クリッフ、A.P.D. サトクリッフ著　市場泰男訳　社会思想社(現代教養文庫)昭46。：(2)と(3)ともに、(1)の通史とは異なり、特定の学者、特定の出来事に焦点をあて具体的に詳しく掘り下げようとする肩の凝らない方式をとっている。

（理学部・生物学）

■図書館委員会報告

○昭和55年度　第7回　S.55.12.23

議事　1．外国雑誌購入費について

館長から、外国雑誌購入費によるタイトルの選定が、別紙のとおりとなった旨説明があり、これを了承した。

また、館長から、この選定の過程で東西間でコンテンツ・サービスを行うことにより、重複を避ける方法が提案されたので、とりあえず8タイトルについてコンテンツ・サービスをお願いしたい旨依頼があり、分館長は、分館の委員会に諮り回答したい旨、説明があった。

○昭和55年度　第8回　S.56.2.6

議事　1．昭和56年度指定図書実施方針について

整理課長から、別紙「昭和56年度指定図書実施方針」の計画について説明があり、審議の結果、了承された。

2．自然系外国雑誌について

(1)　コンテンツ・サービスの問題

分館長から、東部から申し出のあった7タイトルのコンテンツ・サービスを了承した旨及び西部でも東部の雑誌のコンテンツ・サービスを希望している旨説明があり、館長から、極力応じたい旨発言があり、了承した。

(2)　本省の外国雑誌購入費による「購入雑誌リスト」の報告があった。

(3)　基本問題について

館長から、今後の基本問題の取り運び方について発言があり、種々意見交換を行った。

○昭和55年度　第9回　S.56.3.10

議事　1．図書館の基本問題について

館長から、学術審議会の「答申」に対応した本学図書館が分担する機能、及び別紙「今後の図書館について」の説明があった後、種々意見交換を行った。

○昭和56年度　第1回　S.56.5.8

議事　1．昭和56年度図書館経費について

整理課長から、別紙「図書館経費の配分乃び負担等の基準」の説明及び負担方法は前年度の方法を踏襲することで了承願いたい旨の説明があり、種々意見交換の後、次回委員会に予算原案を提示し検討することとした。

2．昭和57年度概算要求事項について

館長から、昭和57年度概算要求の事項について説明があり、種々審議の結果、これを了承した。

3．図書購入費の配分について

整理課長から、学生用図書購入費・参考用図書購入費については、従前の方法どおり外国雑誌購入費については、別紙「外国雑誌購入費の配分について」の配分方法により配分することについて説明があり、これを了承した。

4．その他

(1)　学術情報センター・システム開発調査概要について

閲覧課長から、別紙「学術情報センター・システム開発調査」概要について報告があった。

(2)　大型資料収書計画について

整理課長から、別紙「昭和56年度図書資料(大型コレクション)収書計画調書」のとおり、文部省へ提出する旨の報告があった。

(3)　外国雑誌目録について

閲覧課長から、別紙「自然科学系外国雑誌目録」のリストのとおり集中化された旨の報告があった。

○昭和56年度　第2回　S.56.5.25

議事　1．昭和56年度図書館経費について

館長から、前回検討した図書館経費の負担等の基準について、各部局の検討結果について伺いたい旨の発言があり、各部局からそれぞれ説明があった後、審議の結果、本年度は従来どおりの方針とすることにした。引続き整理課長から、別紙予算案の説明があり、種々審議した結果、この予算案を委員会案として持ち帰り教授会等で検討願い、併せて維持費検討委員会の審議は特段の意見がない限り省略したい旨の発言があり、これを了承した。

2．その他

(1)　昭和56年度指定図書購入費分担額について

整理課長から、別紙「昭和56年度指定図書購入費分担額」について説明があり、これを了承した。

(2)　昭和56年度学生用図書購入費試算表について

整理課長から、別紙「昭和56年度学生用図書購入費試算表」について説明があり、これを了承した。

(3)　学術情報システムについて

閲覧課長から、文部省で作成した別紙「学術情報システム」の解説用パンフレットの紹介があった。

■昭和56年度図書館委員名簿

学部等	図書館委員	
館長	細井寅三	
分館長	大月卓郎	
人文学部	川口博	本間重紀
教育学部	広田文彦	鈴木孝厚
理学部	壇原毅	石川勝利
工学部	堀部安一	
農学部	寺谷文之	
教養部	三浦弘万	佐々木敏光
電子研	山本達夫	豊田耕一
法経短大	平田良	
電子科研	野畑金弘	熊川征司
本部	事務局長	
図書館	事務部長	

■教官著作寄贈図書

村松真一（人文学部）
『近代英詩の諸相―味読と考察―』
村松真一著　北星堂書店　1980
(931／Mu 48　開架)

新妻信明（理学部）
『海洋化学入門』
W.S. ブロッカー著／新妻信明訳
東京大学出版会　1981　(452.13／B 75)

沢田敬也（法経短期大学部）
『ウルマンの日記』
ジョン・ウルマン著／沢田敬也訳
聖文舎　1977　(198.94／W 87)
『ニュージーランドの英語』
沢田敬也著　オセアニア出版　1981
(838／Sa 93)

加藤一夫（教養部）
『経済学原理　第二編(上)』
(初期イギリス経済学古典選集　10)
サー・ジェイムズ・ステュアート著
加藤一夫訳／アダム・スミスの会監修
東京大学出版会　1981
(331.314／St 5／2(1))

田村貞雄（教養部）
『地租改正と資本主義論争』　田村貞雄著
吉川弘文館　1981　(345.43／Ta 82)

日本史学研究室（人文学部）
『袋井市史　史料編三　仲井用水』
人文学部　日本史学研究室編
袋井市発行　1980　(215.4／F 82／3)

松井秀次（名誉教授）
『浜松市史　3』　松井秀次編
浜松市発行　1980　(215.4／H 24)

高橋　亘（名誉教授）
『アウグスチヌスと第十三世紀の思想』
高橋　亘著　創文社　1980
(132.17／Ta 33)

植松　茂（名誉教授）
『植松有信遺文集』　植松茂彦・植松　茂著
光書房　1981　(121.27／U 41)

■浜松分館受贈図書・雑誌

(昭和55年9月～56年4月)

『神戸製鋼70年』　神戸製鋼所編
『トヨタのあゆみ』　トヨタ自動車工業編
『わ・わざ・わだち』　トヨタ自動車工業編
『わたしとくるま』　トヨタ自動車工業編
『年表・花王90年のあゆみ』　花王石鹸資料室編
『炎とともに―新日本製鉄株式会社十年史』
社史編纂委員会編
『炎とともに―富士製鉄株式会社史』　〃
『炎とともに―八幡製鉄株式会社史』　〃
『靴下の歴史』　内外編物編
『製品技術研究所20年史』　新日本製鉄編
『日本香料工業会十年史』　日本香料工業会編
『日網石油精製十五年史』　日網石油精製編
『20年のあゆみ』　菱電サービス編
『東洋運搬機25周年―最近5年のあゆみ―』
社史編纂委員会編
『わが社のあゆみ30年』　マルコン電子編
『日建連十年小史』　日本建設業団体連合会編
『五十年史』　日本放送協会編
『国際電気30年史』　社史編集委員会編
『第六・七回水道拡張誌』　大阪市水道局編
『鉄鋼二次製品年鑑54年度』　鋼材倶楽部編
『鉄鋼二次製品年鑑　55年度』　〃
『子供のヒューマン・バイオロジー』
日本医師会編
『清川泰次の世界』　清川泰次著
『木喰』　原田康次著
『難病克服への道』　礒谷公良編
『健康救命法』　礒谷公良編
『都市社会の宗教―浜松市における宗教変動の諸相―』　田丸徳善編
『日本チェーンストア協会名鑑』
日本チェーンストア協会編

IEEE . Micro.
IEEE . Computer　Graphics and Applications.

■利用統計（昭和55年度）

区分			利用対象者数	閲覧(冊数) 出納	貸出(冊数) 開架	指定	出納	合計
学生	学部	人文	601	4,919	5,459	1,068	2,349	8,876
		教育	977	3,342	6,183	965	1,745	8,893
		理	336	385	3,942	1,643	263	5,848
		農	293	46	983	324	17	1,324
	教養	人文	681	968	3,293	917	548	4,758
		教育	1,038	979	3,406	1,032	420	4,858
		理	399	204	1,409	922	61	2,392
		農	311	66	973	452	40	1,465
		工	954	115	1,579	1,060	84	2,723
	院生等		184	500	619	98	163	880
	小計		5,774	11,524	27,846	8,481	5,690	42,017
教職員	教官(職員)		431	—	508	開架に含む	5,731	6,239
	研究室		(351) —	—	—		9,076	9,076
	小計		782	—	508	—	14,807	15,315
学外者			—	322	—	—	—	—
合計			6,556	11,846	28,354	8,481	20,497	57,332

■分類別統計（学生）

本館　　（冊数）

区分	閲覧 出納	貸出 開架	指定	出納	合計
0 総記	185	426	72	92	590
1 哲学	618	1,642	565	605	2,812
2 歴史	766	1,956	537	511	3,004
3 社会	1,978	8,174	1,227	1,824	11,225
4 自然	326	7,620	4,171	390	12,181
5 工学	170	1,103	571	143	1,817
6 産業	235	670	192	198	1,060
7 芸術	214	1,205	188	112	1,505
8 語学	504	698	278	420	1,396
9 文学	2,257	4,352	680	1,395	6,427
雑誌	4,590	—	—	—	4,590
合計	11,846	27,846	8,484	5,690	42,017

分館　　（冊数）

	貸出		貸出		貸出
0 総記	237	4 自然	3,264	8 語学	21
1 哲学	16	5 工学	6,076	9 文学	51
2 歴史	39	6 産業	11	合計	9,831
3社会	95	7 芸術	21		

■増加図書統計

（　）内は昭和55年度末の累計

	本館 和漢書	洋書	計	浜松分館 和漢書	洋書	計
0 総記	758 (28,376)	314 (7,486)	1,072 (35,862)	101 (3,079)	11 (772)	112 (3,851)
1 哲学	943 (17,318)	763 (10,263)	1,706 (27,581)	43 (2,842)	15 (435)	58 (3,277)
2 歴史	1,656 (32,567)	422 (5,605)	2,078 (38,172)	33 (1,550)	1 (210)	34 (1,760)
3 社会	5,662 (89,948)	2,735 (23,941)	8,397 (113,889)	95 (3,162)	2 (421)	97 (3,583)
4 自然	3,022 (45,434)	2,657 (35,518)	5,679 (80,952)	959 (19,052)	1,156 (22,027)	2,115 (41,079)
5 工学	939 (15,149)	163 (2,228)	1,102 (17,377)	1,447 (26,469)	809 (16,973)	2,256 (43,442)
6 産業	1,380 (27,276)	200 (5,289)	1,580 (32,565)	23 (559)	11 (19)	34 (578)
7 芸術	743 (13,548)	135 (2,229)	878 (15,777)	25 (1,605)	5 (266)	30 (1,871)
8 語学	632 (12,176)	620 (7,639)	1,252 (19,815)	81 (2,810)	20 (2,012)	101 (4,822)
9 文学	1,917 (48,432)	1,798 (25,092)	3,715 (73,524)	117 (3,570)	1 (821)	118 (4,391)
計	17,652 (330,224)	9,807 (125,290)	27,459 (455,514)	2,924 (64,698)	2,031 (43,956)	4,955 (108,654)

■お知らせ（本館）

(1)　夏休み中の長期貸出

貸出冊数：4冊まで

貸出開始日：7月1日(水)

返却期限：9月3日(木)

(2)　他大学の図書館への紹介

他大学の図書館の資料を使いたい人には、紹介状を発行しています。卒業論文やレポートの作成などに御利用下さい。希望者は貸出窓口まで。

■人事異動（本館）

新任　（56.7.1付）

細井寅三　館長　（農学部・教授）

退任　（56.6.30付）

豊川卓蘭　館長　（人文学部・教授）

配置換　（56.5.1付）

山口　譲　整理課総務係→農学部用度係

小板橋道代　整理課受入係→教養部会計係

増井三男　理学部会計係→整理課総務係

池田文明　理学部会計係→整理課受入係

村井恵子　教養部会計係→整理課受入係

■昭和56年度『図書館通信』編集委員

館長　寺谷文之（農学部）　平田　良（法経短期大学部）　下村一夫　塚本雅美　加藤欽也　山川玲子

静岡大学附属図書館報「図書館通信」　第12巻第1号（通巻56号）　1981年7月3日発行
発行所　静岡大学附属図書館　静岡市大谷836　TEL（37）1111
印刷所　黒船印刷　静岡市登呂二丁目10—8　TEL（86）0236